

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
9月号

通巻601号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



耶馬溪の「やまくにかかしワールド」(大分県中津市山国町)

福井市 齋藤正宏さん撮影(文・8頁)

昭和41(1966)年9月23日 月次祭法話より

幸せはどこにあるのか ― 本当の意味で自分を愛するとは ―

法主 矢追日聖 (満55歳)

お彼岸は日本的な行事

今月の月次祭はお彼岸の中日と重なります。お彼岸は仏教から出てきたことではありませんが、日本においては長年の行事になっていたので、世間一般では仏教ということ忘れて庶民の日常生活に溶け込んでいると思います。お盆の場合でもそうです。これは日本の良いところですね。

祝日としてお休みになっているので、遊びに行こうか温泉に行こうかとかプランを立てる人も多いでしょうし、単なる年中行事だという気持ちで見逃している人もいるのですが、お彼岸の意味には非常に深い、尊いものがあるのです。年寄りであれば大阪の天王寺さんにお参りするかもしれませんが、仏教で言う「到彼岸」、彼岸に着くという根本的な意味を考えている人はあまりいないと思います。

「到彼岸」は簡単に言えば「悟る」ということです。我々は年中、煩惱の世界におる。言い換えれば迷い、悩む世界におる。けれどそこから気持ちを切り換えて、彼の岸すなわち向こう側の岸に着けばよいのだということです。向こう岸は仏の世界、悟りの世界、菩提の世界とかいろいろ言葉はあるのですが、とにかく良い所なんです。

こちら側の岸、すなわち此岸しがんと向こう岸の真ん中に川があり、その川を渡ればいいのです。渡るといふことを、「度

す」というのが仏教の言い方です。人を度すというのは、助けて救済する意味です(参考・度し難い・救い難い)。

今まで腹を立てていた人間がだんだん腹を立てなくなる、今まで苦痛に思っていたことが苦痛にならなくなる、何でもかんでも見たものが欲しいと思っていた欲張りの欲が消えていくということに、自分なりに悟っていくことを、こちらの岸から彼岸に渡るというお話しで説いている、それが彼岸の行事の中心の意味だと思っております。

それが日本では長年の間に、先祖供養の行事になつております。お寺さんへ行つて塔婆を書いてもらうとか鐘をついてもらうとかね、そうすれば先祖さんが喜んで子孫も幸せになるといふような行事になっています。あるいは殺生をしてはいけないと、わざわざ魚を買つて池に放して功德を積む、そんな形は現在も残っています。

先祖と子孫との結び付き

お盆については、盂蘭盆経というお経があります。これは目蓮尊者が、自分の産みの母親が地獄に落ちていて、ご飯を食べようとしても燃え上がつて食べられない状況にいると分かったので、どうしたらよいかお釈迦様にお尋ねした。すると、旧の七月十五日に何千人もの僧侶に供養すればよいと、今で言えば社会の人々のためになるような功德を積めば、母親を助けることができることと教えられた。それがお盆の起りです。

ところが日本のお盆の行事では、先祖さんを迎えに行き、裏盆なら八月十三〜十五日の三日間は自分の家で先祖さんと一緒に暮らして、きちんと膳をこしらえてお供えをし、そして十五日の晩になるとかがり火をたいてお供えを持って先祖さん

んを川まで送って行きます。その間は殺生をしてはいけないというので、家で飼っていたキリギリスやセミのような虫を逃がしてやる。田舎のお盆はそんな感じだと思えます。

全国的には盆踊りがあつて、みんなで踊ります。ご先祖さんが家に帰つてきて一緒に暮らしている、うれしいことだという気持ちの表われが盆踊りに変化しているのです。踊りというのは喜びの表現なんですね。

おそらく本家本元のインドではお盆の行事はなかったのではないかと。大体、中国あたりから来たと思われまふ。インドにはなかつたけれど中国で作られた「十王経」というお経があるのですが、そこには死んだら三途の川を渡つて、十人の王のところを回つて裁判にかけられるとあります。一番怖いのが閻魔大王です。このようなお経が日本の昔からの宗教、いわゆる神ながらの宗教とうまく合致して、純然たる日本的な形で残つてきたわけです。

日本におけるお彼岸や、お盆の内容には仏教道の神道だということはないですね。日本人の一つの行事になってきている、それは常にその裏に、先祖と子孫との結び付きがあるからです。インドの仏教では、日本人のようにそこまで密接な先祖と子孫の一体的な考え方はなかつたように思うのです。

日本の神社に祀っている人格神が私たちの先祖に当たるのですが、この人格神と自然神との区別については『すさのお』紙でも書いておきました。他の宗教ではどう言うのか知りませんが、私はそういう言葉を使つて説明しています。

「加美さま」と言うべきは自然神であつて、人格神とは、人間界に姿を現わして、つまり人間として生を享けて死んだ人の靈魂です。日本の神社

には、このような人格霊が祀つてあるのです。人格神、それは我々と血の繋がりのあるご先祖さんなのです。

例えば現在では伊勢神宮が民族の祖廟になつております。日本民族の一番ご先祖として天照大神を祀つています。伊弉那岐命・伊弉那美命や、須佐之男命というご先祖さんもおられるのですが、とにかく天照大神が代表者ということなのでしょう。

秋のお祭りなどは、たいていお宮さんを中心としたお祭りです。先祖の氏神(川氏上)と、その系統の子孫である氏子がつつになつて、お神酒だのお神酒だのと喜んで、一日を暮らします。これは日本の古来から伝わってきたもので、その精神内容が、仏教からきたお盆の行事の中にすつと溶け込んでいっているのです。

仏教の場合ではお坊さんがお経をあげると、地獄からか西方浄土からか、どこから先祖さんが娑婆世界へ帰つて来るので一緒に我々の家庭で暮らすのだと言います。

他方、神社の場合には氏子がお宮さんの境内に集まつてお祭りをするという違いがありますが、その内容において、先祖と子孫が共に暮らし、共に楽しむという日本的な考え方は、お盆と秋祭りとは似かよつたものがあるのです。

だからお盆の行事が日本では発達していくのです。お彼岸の行事にもそういう面がなければ、おそらく日本では消えてしまったと思います。

疑わなければいけない

古代から家族が中心となつて生活してきていますから、日本の宗教というのは大体、先祖と子孫という関係を中心にもつていくところから出発し

ていると思います。それは良いとか悪いとかの問題ではありませんが、現実において、ご先祖が喜ばれた場合には必ずや、うれしい心の流れが子孫に來ますので、また子孫も喜ぶということが起こってくるのです。子孫がいろいろな罪悪をつくつたら悪い想念の流れは、逆に先祖さんのところに行く、そうすれば先祖さんが浮かばれないのです。

そういうようにクルクル回りますから、子孫と先祖が一体となって両方が喜びを持つようになつていかなければうまくいかない。自分の家庭のようになく見えた場合だけでなく、藤原氏とか平家とか源氏とか一つの氏族が社会的権力の座に就けば、一門が栄えるようにという祈り方が出てくるし、それは社会あるいは国、世界へとだんだん拡大していく問題にもなると思うのです。

仏教や神道、あるいは古い既成宗教や新興宗教でも全て、先祖と子孫という関係のところを重点を置いているのも、日本だから出てくることだと思えます。そこでは自分の個人的な向上ということとを、あまり考えないのです。

それよりも、超人間的な仏や神にすがって幸福を得ようとする考え方が多いのですが、まあ横着な話なんです。子孫と先祖を結び付けて現世利益を中心に法を説いておる宗教が割合にあるのです。病氣にかかったり家の中が都合よくいかなければ、先祖さんが浮かばれていないとか、先祖供養をしないとか、あなたが一生懸命に信仰しているのですね。

本当はそうではないのです。先祖さんを言う前に、自分が修養することを考えなくてはいけないのです。まず自分が修養しなければ、先祖さんが浮かばれることはないのです。

もちろん先祖さんの因縁は、結局は子孫に來ま

すが、それを子孫が分析して考えてみることで、ね。仏教で悟りということを言いますが、やはり自分の知識から入ることは大事なのです。ただもう、この宗教に入れば助かるとかご利益があるから有り難いとか、そんな盲目から入るのはいけないことです。それは盲信であって、本当の悟りではありません。

大倭の場合、最初から疑問を持って入れと私は言うております。疑うというのは信じる前提ですから、疑わなければいけない。疑って疑って、疑いきれなくなれば信じればいい。その信じ方のほうが結局は悟りに達するのです。

肉体も借り物

今日はお彼岸で、先祖さんに回^え供養をすることも結構ですが、彼の岸に着く、つまり「悟る」という意味を考える日でもあるのです。

そこでお話しますが、正直に考えてみて、この三千世界で私たちが一番大事なのか。そう尋ねられたら、神さまと言う人がいるかもしれない。あるいは先祖さんだ、自分の子供だ、親だと言う人もいるかもしれない。しかし、これらをさらに掘り下げて、一番最後に到達するのは、おそらくそれは自分であるというのが答えなのです。

私も若い時にこの問いについて考えたことがあるのですが、自分以外何も無い。自分が一番大事なのです。それは利己主義のように聞こえるかもしれませんが、真面目に考えた時に、日常生活や自分の気持ちの動きの中において何を一番大事に保護しているかと言えば、自分以外に何も無いと思うからです。結局は自分が大事、自分がかわい

しかし私の場合はそこで、我が身が大事だから、生まれぬ先から持ってきた自分の役目、使命に対して最も真面目に正直でなければいけないと、もう一つ奥を考えました。その使命を果たさなければいけないということも、自分がかわいいからなのです。もしこの使命の線から外れた場合、私自身がみじめですからね。我が身が一番大事であるがために、自分のお役目通りの仕事をやっているのです。

こういう言い方であなたたちが分かるかどうか分かりませんが、皆さんでも同じだと思ふ。人はどうでもいい、自分さえ良ければいい、そんな排他的なこととは意味が違うのです。

自分がかわいい、けれどその肉体そのものは我が物ではないのですよ。生まれてくる時も、誰その胎に宿ってどこで生まれさせて欲しいと、自分の意志で生まれた者はおそらくいないでしょう。自分の意志以外のところで宿らされ生まれてきている肉体のだけれど、その中に自分が住まいしているものだから、肉体は自分の物だと思っているのです。

なるほど我々の社会には所有権という考えはあるのですが、それは仮の所有で、ただ生きている間だけのものです。百まで生きたいと思っても肉体を持たなければ死にます。我が物ではないのです。着ている物や家とか何もかも一切が借り物なら、肉体も借り物なのです。

私がかわいいと言うのは、自分の肉体ではないのです。肉体の中にある自分の心、自分の魂、靈魂、それを愛するのです。そのような意味で、私は一番自分を大事にしているのです。自分の生まれてきた時のお役目に対して正直に行くのが、一番自分をかわいがっていることになるのです。

歪められている自分

他の人も皆、それなりに自分の心、魂、靈魂を持って生まれてきています。あなたたちの持っている自分と、私が持っている自分は、形の世界ではなく心の世界で互いに交流しています。だから、その心が仲良く通じるような自分をつくっていかなければならないのです。

ところが、なまじっか肉体のような殻を借りているために、あるいは人間社会には貨幣があり所有権がありという厄介があるために、本当の自分がかなり曲げられているのです。皆が歪められています。これが、いわゆる迷いや煩惱と言われるものなのです。

生まれながら最初に持ってきた自分は、「加美」から分かれた分身霊なのです。いろいろな認識の誤りや社会の長年の伝統習慣のために汚されてきた、そういったものを剥がして剥がして、本当の意味で自分を愛するという心をつかめたなら、他人をも愛することができるようになるのです。

魂の世界はお互いに横のつながりがあるので、自分一人だけの存在はない。一人だけ孤立するとはありません。自分がかわいければ、自分を取り巻く周囲もかわい。自分だけがかわいいなどと言えなくなる、そういう結び付きなのです。人と切り離しての自分というはあり得ない、そういう悟りが必要なのです。今の言葉に直せば、社会の一員として社会性を持った幸福感ですね。いかにすれば自分が幸せになれるか、それを社

会と切り離して自分個人だけではなく、社会全体の中の一人であることから考えていく。社会の中の一人であることを基礎として、自分の幸せはどこにあるかを、互いに考えていくのが、今の時代の宗教的な方向だと思ふのです。

お彼岸には天王寺さんに参るとか、ただ神や仏を拜むということにとらわれないで、社会性を持った自分というものを考える。社会全体、世界人類の立場においての自己を見つめて、現在のややこしい、ひっくり返りかけている社会、アンバランスな社会というものをぐっと元通りにねじ返し、均衡を取っていくことを皆一人一人が心得るような、そういう宗教的な歩み方をしていって欲しいと思ふのです。

(文責・編集部)

「神通力如是」の真意をさぐる

じんずうりきによぜ

第九回

大倭教の源流にさかのぼって

大倭教の源流にさかのぼって

今回の原文の紹介はごく短いものです。しかし神武系の人たちの九州からの東遷は、大倭の大祖神である奇稲田姫命からの「御神託」によるものであるという、日本神話の通説とは異なる大倭の霊界(大倭太加天腹)にとって根幹をなす指摘のある部分なので、法主の言葉を引用しつつ解説を加えることにしました。(三人の会)

原文

十一月十日 午前八時、於鳥見庄山

「倭姫、今シバシオン前ケガシ奉リマス、何トゾオ許シアレー」

アーアーアー題目、

「豊葦原、^①チイホ秋ノ瑞穂ノクニハ、皇孫ノイマスクニ一日ノ本ハ、世々トコシエニカハラジナリ、アーアーアリガタヤリ

「皇祖、^②瓊杵命ニノタマヒシ

トヨアシハラノ、チイホ秋ノ瑞穂ノクニハ、^④吾ガ皇孫ノシロシメスチナリ。汝皇孫、^⑦ユキテシラセ。サキクマセ。天津ヒツギノ、サカエマサン。天地トトモニ、^⑩キワマリナカルベシ

「御神勅、倭姫、慎シミ申上ゲ奉ル。

吾ガ皇孫、コノ日ノ本ハ、君タルベキ地ナリ。汝、オンミ等妙法トナエ、悪魔怨敵退散イタセ。今、日ノ本ハ閻ナルゾー妙法トナヘコノ閻ヲ押開キテゾ諸天善神歡喜シテ、善哉、善哉、サケブヨニ、早く早クナシ玉ヘ」

合掌

「吾レハ、奇稲田姫。」

日聖ヨ、ヨク承レ。吾レコノ世ニ於テ
妙法トナヘ、シンノ正法立テル役目、亦
タ殊ニ因縁ノウズモレ玉ヘル代々君、題
目トナヘ、^④陵墓ノ確定、明カニセヨ。

我が日本ハイマ闇ナルゾ。コノ闇ヒラ
キテ皇孫ノ安ラケク、平ラケクオサメル
ヤウ、マチカニ迫リシ今日ノ代ニ心カラ
ノシンノ題目トナフルモノ集リテ、大倭
トビノモリ、悪魔怨敵退散ノ祈願ヲイタ
セ。今コノ天上ニテモ諸天善神ミナコ
ゾツテ、真ノ題目トナヘルゾヨ。トモニ
国タミ心ヨリ、心ナルモノ集ヒキテ真ノ
題目トナヘヨォー。前ニハベル倭姫、神
楽ソウシマイラセヨ」

註 釈

- ①チイホ秋 「千五百秋」。限りなく多くの年月。
- ②永遠。(福武書店『古語辞典』による)
- ③瓊瓊杵命 記紀による天孫降臨神話の神。天照大神の孫で天忍穗耳命の子とされる。アマツヒコヒコホノニニギノミコト、アメニギシクニニギシアマツヒコヒコホノニニギとその名が記されるが「ホノニニギ」は稻穂の豊穰を意味すると考えられる。天照大神の命で、大八洲を治めるため、天壤無窮の神勅を奉じて、高天原より日向(宮崎県)の高千穂峯に降り、笠狭碕の地に宮殿を営みコノハナサクヤヒメを妻とし、この地を治めたとの神話伝説がある。(むさし書房『日本人名事典』による)
- ④ノタマヒシ 宣う。(尊者が下位の者に)言っ

てきかせる。(岩波書店『広辞苑』による)

- ④吾が皇孫 皇祖(奇稲田姫)に繋がるニギハヤヒからの代々の「すめらみこと」たち。
- ⑤シロシメスチナリ 「領ろし召す」お治になる地です。(福武書店『古語辞典』による)
- ⑥汝皇孫 九州日向に降誕したニニギノ命に繋がる代々の「すめらみこと」たち。
- ⑦ユキテシラセ 「領らせ」。行って治めよ。
- ⑧サキクマセ 「サキク」(幸く)。さいわいに。幸福にしなさい。
- ⑨天津ヒツギ 天つ日嗣。皇位の継承。(三省堂『大辞林』による)
- ⑩天地トトモニ、キワマリナカルベシー 天や地のように終わりはない。
- ⑪御神勅、倭姫、慎シミ申上ゲ奉ル クシイナダ姫様からのお申し付けを私倭姫が慎んで申し上げます。
- ⑫君タルベキ地ナリ 君：国民を統治する人の称。タルベキ：その資格がある。ふさわしい。日の本は皇孫のお治めになるべき地(国)です。(福武書店『古語辞典』による)
- ⑬陵墓 みささぎ。山陵。天皇・皇后・太皇太后および皇太后を葬る所を陵といい、その他の皇族を葬る所を墓という。(『広辞苑』による)

※「陵墓の確定」については次の「解説」を参考のこと。

解 説

ここに突如として神武天皇(神日本磐余彦尊、始馭天下之天皇)の東遷に關わる言葉が現れる。日本書紀には(前略)さてまた塩土老翁に聞くと「東の方に良い土地があり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐舟に乗って、とび降ってきた者がある」と。思うにその土地は大業をひ

ろめ天下を治めるによいであろう。きっとこの国の中心地だろう。そのとび降ってきた者は、饒速日というものである。そこに行つて都をつくるにかぎる(講談社学術文庫『全現代語訳日本書紀』による)との記述があるが、塩土老翁という靈能者により、すすめられた遠き、美しくニ、オオヤマトへの東遷は、ここではオオヤマトの大相神クシイナダヒメによって語られている。

その結果、オオヤマト、タカチホ、二大勢力による武力戦となり、最後は金鷄の出現による和解となつて、この東遷物語は終息する。

ここでその間の消息を法主の残された記述やお話でたどれば、まず『おおやまと』紙、平成26年7月号に載つた遺稿『大倭神宮伝承の紀 後編』(上)の抜粋から。

《西の王族、ヤマトに遷る

かつて、昔の昔に日本列島の西の島である九州地方に漂着した集団もある。彼らは筑紫の屋根と言われる阿蘇の高原地帯に根を下ろし、倭(ヤマト)と同じ流転を経て、有徳の王のもと九州一円を経営し統治していた。

その頃になると、文化交流も繁くなり各地を飛び回る者も多かった。中に倭国の情報をよく知っている者がいて、「東に倭というすばらしい佳き国がある。そこは我が日本秋津島根の中心の位置を占めていて、青山が四方を巡り、誠に穏やかな天地自然の恵みが豊かな土地である。ここに天神地祇に通達している長曾根日子命という大王が居る。大王の徳によつて倭には災害はなく、人々は大王を神と尊敬し、誠に平穩無事に和氣藹々と幸せに暮らしている。

また外敵の侵略に備えて強靱な男子軍、女子軍を配置し、各種の武器・武具も完備して軍事訓練

も欠かしていなかった。倭は模範とすべき佳き国、国のまほろばである」と讚美したのである。

この情報を得た西阿蘇高千穂、知保の大王、彦波瀲武鸕鷀草葺不合命は、この話にすっかり魅力を感じた。同時に、大祖神から、「日本列島全域を統治するには、倭のほかに神慮にかなう所はない。既にそこには使命の大王が居て、天業恢弘（※帝王の事業を押し進めること）の基礎作りはできています」という御神託があったのだ。

この天啓を受けて、知保の大王は断固として倭東遷を神に誓い、我が子四人の男子に「一挙、倭に遷ることを命ぜられた。長兄彦五瀬命、次男は稲飯命、三男三毛入野命、四男狭野命」という。

しかし伝え聞くところによると、倭には強烈な大軍があるという。万一、話が互いに理解できず戦になることがあるかもしれないと思って、東遷の大群団に武器、武具を用意し開戦の覚悟をもって、海路瀬戸内海を東へ、大倭を指して威風堂々と行進していった。》

ここに現れる「大祖神から」の「御神託」は、『神通力如是』によれば、タカチホ族の大祖神・アマテラスからのものではなく、オオヤマトの大祖神・クシイナダヒメからのものとなる。法主はアマテラスは太陽神の象徴であり人格神ではないと言っておられる。また、『おおよまと』紙、平成28年12月号に載った平成6年12月4日の金鶏祭・大倭神宮での法話を引用する。

《天啓による政權交代

今から百七十二万年前と言うから永い話や。奇稲田日女命さんと須佐之緒命さんがここ（大倭神宮）に初めて来られて、二人の間にお生まれになったのが饒速日命さん。饒速日命はこの場所です。

まれてます。

それから何万年も後の話になんねんな。神武天皇が——天皇と言うのは後のことやけれども——九州から来ていることは事実なんです。その時、饒速日命の系統が歴代のオオヤマトの大王さんで、代々、長曽根日子命やってん。

そして九州から来た神武天皇さんは、ヤマトのお姫さんと結婚して長曽根一族の婿養子になってはるの。そこから伝わってきているのが、現在の天皇家なんです。だから長曽根大王の続きであるのに、『日本書紀』では長曽根日子を賊として扱ってるんですよ。まあそうせんとね、九州を中心に考えたら、賊軍と言わないと話合は合わない。

(中略)

それで瀬戸内海から河内を通って生駒山を越えて、ヤマトに入ろうとした。ヤマトの方では、来るといふ情報が入ってるから日下の辺りで待機してとってん。

そら戦争にならんかったんです。九州は、パインと負けてしまった。一番上の兄さんの五瀬命は、矢に当たった。『日本書紀』には流れ矢と書いているけど、『古事記』には痛矢串(毒矢)とはつきり書いている。それで和歌山の方へ回って行った時に亡くなっている。一番偉い大将がね。あとの弟さん二人も熊野灘で死んでしまった。

それで四番目だったのが神武天皇なんです。どう考えてみても、九州は弱かってん。あんまりかわいそうやから葛城辺りの加茂氏とかが協力してくれて、南の方から何とかヤマトに入ってきた。そんなのが実情なんです。

鳥見(登美)で戦争した時は、もう今負ける、オオヤマトの方が勝どきを上げようという瞬間に、上から光がボワーツと出てきた。それを天啓として長曽根大王の方から講和の条件を出したん

やな。それで神武天皇は助かっているわけや。条件を受け入れて、自分の連れてきたお妃や子供とは別れて、長曽根の一族のお姫さんと結婚して長曽根大王の後を引き継いだんや。大王って天皇(スメラミコト)のことや。

実情がそうであるのに、だんだん賊軍扱い。日本の歴史から抹殺されています。昭和十五年の紀元二千六百年記念の頃、私が「長曽根日子……」と話しただけで、「弁士注意」と言われてんからね。それでここに居る人格霊は気に入らん、腹立つねんな。人間的やわな。ここの神さんはご機嫌が悪いわけ。

それが終戦から五十年経って、ようやく私がこんなことを言うたって誰も不思議に思わない時代になりました。》

ここでは神武東遷での話が正しく伝えられず、顕幽の世界に大きな禍根を残したまま、それが原因となり、その後の日本や世界の歴史に様々な争い事を引き起こしながら現在につながっていると言われている。ここに突如現れた大祖神からの御神託は暗に、その事を示す。

オオヤマトとタカチホ両族の大和(和解)のもと、新生なった神武天皇から現在に至るまでの皇統にその始めから過りがあり、過りを正せとの詔の様に聞こえる。

そしてそれに続くクシイナダヒメからの直接のお言葉にある《……亦夕殊二因縁ノウズモレ玉ヘル代々君、題目トナヘ陵墓ノ確定、明ラカニセヨ》は歴史上抹殺された神武以前のオオヤマト歴代のスメラミコトを思い起こし現代に復活せしめよとの意にもとれる。そしてその正しい歴史上の修正による日本国民の新たな認識が闇を押し開く新たな希望になるとの神託と聞こえるのだが。

大沼安史を偲んで

宮城県仙台市

大沼 久美子



6月22日10時半、大沼安史は帰幽いたしました(満71歳、※大倭会会員)。彼の大好きだった紫陽花の花が雨の中で青々と輝いていました。

大沼が、大倭紫陽花邑と法主様にご縁をいただいたのは、不思議な出来事がきっかけでした。

それまで暮らしていた仙台の地を離れなくてはならない事が起こり、静岡の友人に助けを求めました。夜遅く着いて、私たちは安堵の中で眠りにつき、翌朝、目覚めた大沼が私に聞きました。

「今、部屋の入り口で、この部屋の中を覗いていた人がいたのだけだ」

私たち二人以外誰もいません。

「どんな人？」

「年配の男性で、紫がかかった濃紺の着物を着ていた」

私は、もしかしたら……と思ひ、友人の部屋に置いてあった野草社の雑誌『80年代』を持ってきて、あるページを開きました。

「この方？」

「あ、そうそう。この人。顔はよく見えなかったが、頭の形が同じだ。この人は誰？」

「奈良の大倭紫陽花邑の矢追日聖さんよ。亡くなられたけど」

大沼は、『80年代』の法主様の記事を読み始めました。それが大沼と大倭紫陽花邑との、初めての出会いでした。その後、法主様のご本『やわらぎの黙示』『ながそねの息吹』を読み、友人が持っていた法主様の法話のテープを聞き、すべてを包

み込むような大倭の世界に傾倒していきました。ある日突然、大沼が、

「大倭紫陽花邑に行こう！」

と言ひ出し、即出発。日付は忘れたけど、大倭会館の駐車場に着いたら、雨上がりの中で、カタツムリのカップルが交わっていたのを覚えていました。

その頃、大沼は彼を苦しめている自分に来る何かと闘っていました。霊的なものなのか人工的なものなのかわかりません。頭の中で響くそれが、彼の思考を邪魔していました。私には、それが電波のようなものというところまではわかるけれど、それ以上ではありません。言葉として来るのは、聞いてしまうのでどんなにか辛いだろうという想像しかできません。

大倭会館で一晩眠り、翌朝、大沼は一人で拜殿に上り、祈りを捧げていました。後から私が拜殿に行くのと、ある場所に立つと拜殿の中に電気がつかまりました。あら？今まで暗かったわけ？大沼には、拜殿の照明の自動スイッチが作動しなかったの？気がなつたけれど、私は大沼の傍に行き、立って祈っている大沼の横に座り、それから体を横たえました。脱力して拜殿の気を感じていたところ、突然大沼の様子が変わりました。

「どうかした？」

「祈っていたら、今、何かゴーツともものすごいエネルギーが来て、俺の頭の中のを、上半分吹き飛ばしてくれた」

「……少しは楽になった？」

「うん。ありがたい……」

大沼は泣いていました。それから大沼は、拜殿の外に出て、降り注ぐ日の光を手の中に優しく包み込むようにして、静かに微笑みました。

「ありがたいなあ……」

全て消えたわけではなく、それでも激しく来て

いたものの上半分がなくなったことで、だいぶ楽になったようでした。

「残りの部分は、自分が学ぶために残してくれたのだろうなあ」

『おおやまと』が届くのを毎回楽しみにしていました。大沼は、哲学書や宗教書を読むことが多かったのですが、「ああ、これは法主さんが言っていたこと同じだ」と、大沼は外国の本の中にも大倭を見出していたみたいです。

2011年3月11日の東日本大震災による原発事故当時、事故について正確な日本の報道がない中で、大沼は外国の報道サイトからたくさんの情報を日本語訳して、自分のブログに載せていました。その内容を2冊の本にまとめ、3冊目に入るところで、パソコンの不調や自分自身の体調の不調が始まりました。仙台を出ることになったのも、その事の延長上にありました。日本の原発の闇の部分に触れた彼は、どうも早い段階から、原発利権に絡む組織から狙われていたようでした。

その後、その『世界が見た福島原発災害』のシリーズは第7巻まで書き上げ、第8巻目『ペーリング海からの警告』を書き始めていました(緑風出版発行)。

他にも、彼の仕事のもうひとつのテーマである「教育」に関して、アメリカのフリースクール「サドベリー・バレー校」の創始者、ダニエル・グリーンバーグさんの近著を翻訳したいとも思っていました。彼としたら、無念だったと思います。

大沼安史さん略歴

1949年、仙台市生。東北大学卒。北海道新聞に入社し、社会部記者、カイロ特派員、社会部デスク、論説委員を務めた。1995年に退社、フリーのジャーナリストに。2009年3月まで東京医療保健大学特任教授。

あじさい日誌

8月9日 大倭墓地清掃と紫陽花邑の大掃除。猛暑にもかかわらずご参加下さった皆様、地域貢献の大倭安宿苑職員さん達、お疲れ様でした！

掃除中の午前11時02分、長崎原爆投下の時刻に、李章根さんによって拝殿の大鼓が打ち鳴らされ、気の付いた人が各自、その場で黙祷をしました。

8月15日 大倭神宮で午後2時から大倭教立教開宣七十五年の記念祭が開かれました。

8月23日 大倭大本宮月次祭。この日は、昭和41年7月23日の法話でした。今年7月号『おおよまと』に「人間的に向上するよう自分を錬磨していく」として掲載分。

8月25日 9日の大掃除の時に大倭会館の縁側の一枚ガラスが割れる事故あり、その入れ替え。9月2日 午前11時半から東方の碑前で東光大祭・祖霊祭開始のご挨拶をしました。

12時から奥津齋庭で教長さんを祭主として祖霊祭が行われ、一方、拝殿では昭和62年9月7日の東光大祭の記録映像を見て頂きました(同年9月号『おおよまと』に「大倭の歩みを振り返って」として掲載分)。

その後、教長さんの入場を待って東光大祭が行われました。

皆様のご協力のお陰で密集を避けることができました。拝殿入口で一応検温も……。経木は来年の大とんどまで、拝殿でお預かりしておりますとのこと。

9月3日 本紙編集部の井手泉さん(奈良市)が長曽根寮に入られました。

9月6日 大倭神宮月次祭。奈良市の山田照久さんが初参加。インターネットが大倭とご縁の始まりだそうです。夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では9月2日 東光大祭・祖霊祭に、当法人物故者のお祭りをお願いしました。

(菅原園) 8月30日 かき氷をいろんな味で楽しく彩りました。

(須加宮寮) 8月27日 大倭墓地へ物故者墓参。皆で手を合わせました。

(長曾根寮) 8月23日 (特養) カステラにホイップやみかん缶でデコレーションしておやつ作り。

8月26日 (デイ) 作品作り。折り紙で立体的な金魚鉢に、折り紙の金魚を泳がせました。

(茂毛菴園) 8月25日 4名の方の参加で施設長との定例懇談会。昼食の創作料理が好評でした。

(八重垣園) 8月20日 8月生まれ4名の方の誕生会をしました。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 10月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会 当分の間、中止とします。

(9月の第660回祝会とあるのは620回の間違いでした)

*月次祭(大倭大本宮) 10月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮) 10月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

表紙写真について

福井市 齋藤 正宏

2014年の夏の終わり、東北での復興ボランティアに一区切りをつけた私は、その後の暮らしを考えるための旅を始めました。写真は九州を巡った時のもので、熊本市から日田を抜け、つれあいの祖母が暮らしていた英彦山麓に分け入ったのち、中津市(大分県)へと山国川を下ってゆく道すがらで遭遇したものでした。

過疎化の進んだ山間の集落で、案山子たちによって、かつての賑やかな暮らしが音もなく繰り返されているのが妙に印象的で、案山子たちの祭りに混じって、しばしの時を過ごしたのを覚えています。

編集後記

▼8月号によせて

〈埼玉県熊谷市 得田典子〉 編集後記の「まあ、傷は浅い！なんちゃって」。これ気に入りました。

〈新潟県佐渡市 大滝哲也〉

最後の「訂正」読みました。結局最初の昭和41年でよかったですね。私が大倭にお世話になった54年、『紫陽花邑』という新しい本が、同居の津田貢さんの部屋にあったので、編集に携わりつつ51年でも違和感なかったのですが……。なぜ？

※録音冒頭の今井富蔵苑長の「8月の月次祭」法話です」が、法主様は「東光大祭は来月8月30日」と話してはるので、どうも7月の言い間違いらしいと。そこから私の記憶が8月10日とすべって、ネットで調べ8月10日が旧7月15日になる年が昭和51年だったというわけ。

〈大阪府富田林市 青谷由美〉 『むすび便り』編集担当

私は大倭で法主さんの姿をお見かけすることはあっても一度もお話したことがありませんでした。半世紀を経て、法主さんの言葉に触れることができるのも、この新聞のおかげです。

後に、地元の方々が始められた耶馬溪(中津市山国町)の「やまくにかかしワールド」であることを知りました。

「百年足らずの人生やから仲良う行こうやないかと、そんな割り切った心境になんでならへんのかなと思う」には素直に納得！ 親子の関係なんてまさに百年もいっしょにはいられない。

〈岡山県真庭市 湯浅芳郎〉 岡山という表紙写真を見てすぐ矢部頭さんに電話しました。

〈青森県弘前市 石田勝利〉 毎月ありがとう！ 暑くない弘前で何か申し訳ない感じがです。コロナも元々人が少ないのに、テレビで毎日、あれダメ、これダメと言う。ビビって時間を止めてます(ピタリ)。

2月より毎週、青森から高橋延之さん(あじさい治療院)が駆けつけてくれます。鍼灸、整体、吸引、ストレッチで腰と首の脊柱管狭窄症を治してもらってます。おかげで何とか手紙を書けるようになりました。

梨花さんの頁を見て、36年前(私36歳)を思い出しました。暗いステージにひとり立つマル七太郎。次第に不思議なほど心を動かされる。これって何？もう一人の自分がいる！

公演後の打ち上げ会があるはず。マル七太郎に思いを伝えたかったので仲間に加えてもらいたかったが、アクシデントで願いは叶わず、未だに悔やまれる人です。(春)